映画「家族」の道

写真は朝日新聞4月11日朝刊「みちのものがたり」掲載「風見一家の旅路」。日本映画を代表するロードムービーといわれる松竹映画「家族」1970 年公開。長崎県・伊王島の炭鉱で働く、井川比佐志さん演じる風見精一が、北海道で酪農に取り組む友人の誘いを受け、成功を夢見て入植を決意。家族とともに鉄道と船を乗り継いで道東の根釧原野にたどり着き、定着する姿を描いた。「日本列島縦断 3 千㌔」という破格のロケ。妻の民子には倍賞千恵子さん。父親の源蔵は笠智衆さんが演じた。山田洋次監督は当時 38 歳。

長旅の果て、道東の中標津にたどり着いた一家。井川さんは、一番印象的なシーンに、一家の歓迎のため入植した人たちが開いた宴会で、笠さん演じる父親の源蔵が「炭坑節」を歌う場面を挙げた。「あの場面は、何度見ても、泣けてくるんです」。炭鉱労働者として一家を養ってきた父親の人生を凝縮したような姿だからだ。そして源蔵はその夜、亡くなる。「日本という大海の中で、小さな船でもまれつつ、懸命に生きている家族がいる。そういう家族（と）ちゃんと向かい合って、見つめてみよう」と思ったと監督は 2018 年放送のテレビの特集番組で語っている。

写真下は吉見俊哉『万博幻想―戦後政治の呪縛』ちくま新書、2005 年の序章扉に掲載されている 1970 年大阪万博の会場入口で、太陽の塔を見上げる家族。民子の背中の赤ちゃんは、東京で容態が急変して救急病院を探しまわるが、亡くなってしまう。そのときの悲嘆にくれる、家族の姿が忘れられない。

吉見さんは「1970 年という戦後日本史のなかの重要な転換点、そこに一瞬、佇んだ日本列島と日本人の表情を、この山田洋次の『家族』くらいに見事に切開してみせた作品をわたしは知らない。‥‥　大阪万博が寿いでみせた成長の夢は、膨大な数の大衆の欲望を呑み込みながら、幾多の貧しき人生を拒絶し、脆き命を押し潰し、山野をコンクリートで固められた都市に変えてきた」と書いている。

敬愛する山田洋次監督作品は、寅さんはもちろん、「北海道」を舞台にしたシリーズ、「学校」シリーズなど数えきれないほど鑑賞してきた。最近も「男はつらいよ　お帰り寅さん」に感動した。大学時代から半世紀にわたり、お世話になってきたわけだ。この「家族」は、山田作品のなかでも、とりわけ学ぶことが多かった。吉見さんも言うように、戦後日本史、日本経済と地域を考えるうえで大いに参考になった。大学の講義でも、「家族」の道をたどって高度成長の光と影を語ったものだ。

（2020 年 4 月 13 日）